

中野成樹

中野成樹は演出家。ベテラン枠で参加。誤意訳という独自の手法で翻訳劇を手がけるほか、まちなかでの作品づくりも。研究所では二年目のイベント『だれかのみため 展示と実演』を取りまとめる。

たとえばそれを思い返したとき、まず頭をよぎるのは、「あれ、やる必要あったのかなあ……？」ということ。決してネガティブな意味ではなく。なんというか、研究所って「やったら負け」だったんじゃないかなあ、などと。そう、よく思う。やったら負け。なんだそりゃ？

僕は、劇団を主宰しているし、企画・演出などをやってもいるので、基本「やる」人間だと思っている。おもしろそうな戯曲を見つけては「やる」し、いい劇場やスペースを探しては「やる」し、日々なんでもいいから「やり」たかったりもする。パスがくればシュートするし、弁当が出れば食うし、山があれば登る。というか、やる人間なので、まずはシュートを打てる位置に居場所を探すし、お腹がすぐほどの作業をしまっし、山の前に立つときにはすでに登山靴を履いていたりもする。つくる人間、それが普通。とずっと

思っていた。つくる人間、それはやる人間。しかし、研究所は違った。

パスがくればその行く先に視線を送り（自分はスルー）、弁当が出れば写真を撮り（蓋を取って、撮って、もしかすると録って、また蓋をする）、山があれば谷に思いを馳せる。なんだそりゃ？

「つくりかた」は「つくること」ではない。ぼんやりとだが、それはその通りだとわかる。「料理レシピ」は「料理」ではない。通常、料理レシピは実際の料理につながる。それで、美味しい！ だの、不味い！ だの。しかし、研究所はこのつながりに疑問をはさむ。むしろ、料理レシピを料理から独立させようとさえしているのでは？ 独立した、競技としての料理レシピ、とか。

もし、料理レシピ・コンクールがあったとして、その審査を実際の料理なしに行うことは可能なのか？ おそらく研究所は可能だと考える。「料理名…にんじん、素材…にんじん、調理…なし」のコンセプトで準優勝、「文字のポイント数とフォントのチョイスが素晴らしい！」で優勝。なんだそりゃ？

中野 どうして実際につくらないんですか？

長島 いや、つくったら負けっていうか……

中野 負け？

長島 いや、違うな……。勝ち負けじゃないし、つくってもいいんですけど、

中野 はい……。でも、つくらない？

長島 つくるのは、みんなもうやり尽くしてるんじゃないかなあ……

中野 やり尽くしている……

長島 なんというか、もう一度、レシピつてもものを見直さなきゃダメな気がして、

中野 レシピつてもものを見直す……？

長島 混乱させるかもしれないですけど、レシピって、もう文字になった瞬間からレシピじゃなくなっていくって、

中野 レシピじゃなくなる……？

長島 あー、なんて言えばいいんだろう、レシピってどうしても主観が入ると思うんですよね……

中野 それが余分だと？

長島 いや、むしろ、それなんじゃないかなって、

中野 それ？

長島 その主観が一番大事っていうか、

中野 はあ、

長島 その主観ってのは、主張っていいんですけど、だったら、わざわざ実際に料理をつくらなくても、十分に主張は読み取れるんじゃないかって、

中野 なるほど……

長島 昔、鎌倉時代に弦念っていう僧侶がいたんですけど、天台宗かな……？

中野 はい、

長島 その人が、ものすごく細かく料理の、いまでいうレシピを書いているんですけど、で、僧侶だから、いわゆる精進料理的なものが中心なんですけど、なかには、熊のステーキみたいのとか、鹿の足の煮込みみたいのもあって、

中野 え、僧侶なのに？

長島 だから、実際に弦念はつくってないし、食べてないんですよ、

中野 え？ え？

長島 完全に創作なんですよ、

中野 え、でも、世間には実際にあった料理なんですか？

長島 もしかしたらあったかもですけど、たぶんない、まだそんなに食肉がすすんでな

いんじゃないかな……？

中野 え、じゃあ、それはなんなんですか？

長島 たぶんですけれど、弦念が、色々な精進料理の記録を残しているうちに、「たぶん、これならいけるだろう」っていう、予測？ を書いたんじゃないですかね？

中野 食べたこともないのに？

長島 たぶん、

中野 予言？

長島 ですかねえ？ で、そうだったのが、小さい木版みたいのにびっちり彫ってあるんですよ、

中野 なんかヤバイじゃないですか、

長島 妙なんだなあ……でも、レシピっていう、

中野 なんか、それはもうレシピっていうか、“行い” じゃないですか、

長島 そうなんですよ、だからレシピっていうのも、その書いた瞬間の、思いついていうか、情念みたいな、それそのものの気がして、

中野 なるほど……そりゃ、実際につくったら負けですね……

長島 つくってもいいんですけど、

中野 うーん……。

『だれかのためゆめ 展示と実演』の際、僕は、それなりにずっと苛立っていて。それは、主には研究所のメンバーの作業進行の緩さや、観客へのおもてなしの準備不足に対してで（という僕もかなり遅れましたが……）。作業物の提出締め切り日になって「コンセプトから見直したい」だとか、直前に「新たに〇〇さんにインタビューをしたい」だとか、当日も「セッティングはしたので、あとはお客さんが各々で見所を発見して、楽しんでもらえれば……」などなど。「おせーよ！ ってか、おそくてもいいから、お客さんまかせの、そのぬるさをどうにかしろや！」などと心のなかで大いに怒鳴り散らしながら、口から出た言葉は「実際問題、これじゃあちょっとヤバイかも……？」というソフトなもので。それはきつと、「ああ、俺、つくりかた研究所なのに、実際（につくられたもの）の話をしちゃってるんだなあ……」と、少し申し訳ない気持ちになったことが大きな原因かもしれず。

実際につくる、そしてそれを外部に開く。その際には、多くの場合どうしたって「いますでにある、あらゆる“良い”を取り入れざるを得なくなる」。だって外の人に、自分の思いや狙いなどを少しでもストレートに伝えたいから。そして、そのための“良い”方法

がすでに沢山あるのだから。

その「良い」の扱いには、おそらくはつきりと習熟度がある。ゆえに出来不出来を指摘できてしまう。研究所の、とくに若手には、その出来不出来の指摘を極端に嫌う気配があり、正直、ある時期の僕には病的とさえ思えた。しかし、弦念さんの、すみみとか、おもしろさを感じてしまったいまは、実際につくらなくてもいいのかなあ、とも思いとすると、出来不出来の指摘はまったく必要ないものにも思える。しかし一方、やはり僕はやる人間であり。

やる人間は、実際、習熟度、つまり出来不出来が、問題になる。

やったら負け、つてのはこういうことだったんじゃないだろうか。そして、「あれ、やる必要あったのかなあ……」と。

さて、では、出来不出来を問題にすることは問題か？ つてことで。さてでは、というよりも、そもそもということかもしれない。

じゃあ、こんな文章も、この冊子も、どうでもよくね？ つてわけにはならないよねえ……？ うん、なんだそりゃ？

編集注…中野と長島の会話はフィクションです。